



「第二次日本経穴委員会」便り

～第5回 参加しての印象～

第二次日本経穴委員会作業部会委員・日本理療科教員連盟 かとりとしみつ 香取俊光

今回は、私が作業部会に参加しての印象記を中心にお便りいたします。

経穴は世界化している

私は理教連代表なので、視覚障害者の立場も考えたり、WHOという世界に通じる仕事を依頼されて責任の重さばかりが先行しました。しかし、これまで各委員より述べられてきたように「取穴部位のスタンダード化」、「経穴の世界共通語作り」が目標なのです。私を含めた何人かの委員は、どのような目的か、作業の手順、日本案決定の基準などで戸惑いが見られました。部会やメールのやりとりを繰り返すたびに「一定の基準の下に作られた経穴部位」の作成がゴールではなくスタートであることがわかってきました。大きな世界の流れが知らぬところで進んでいます。これまでの便りからわかるように、すでにWHOで361穴の名称と記載順序が決まり、今回の準備段階で標準点や寸法も決まっていました。私を含めた何人かは、この段階で作業部会に招集されて大きな戸惑いに包まれました。多くの読者も同感ではないでしょうか。それが今度は私が与えてしまうのだと実感しています。また、私の役目としてはこの後が大変だ、スタンダードとなった経穴部位などをどう教育現場に反映させ、どのように教科書の改訂

をしていかねばならないのだろうか、ますます責務の重さにさいなまれています。

同学の喜び

では、嫌なことばかりかということ

- ・趣味…勉強 (好きな研究)
- ・仕事が終わったら…好きな勉強
- ・ステータスシンボル…蔵書量
- ・ストレス解消法…好きな勉強をする
- ・夫婦喧嘩をしたら…勉強
- ・勉強しすぎて…目が悪くなった
- ・座右の書…鍼灸の古典、四書五経、大漢和辞典

と、こんな人は私1人かなと思っていたら、小林・浦山委員も大同小異で同感といわれ、孤独感・疎外感が救われました。本に没入していてもよりいっそう楽しい気持ちでいられるようになりました。作業の当日も、休憩時間も、会議後の勉強会 (アルコール付) は関係する事項の話ばかりで、普段の疑問が晴れることも多くありました。

IT時代は経穴学にも

私は本委員を契機に、重い腰を上げて、メールを使うようになりました。メールは前回の小林委員の報告の通り中国にデータが送れずにとんでもないハプニングも起きますが、浦山委員

の報告の通りメールは今回の大きな武器となりました。小林委員の大活躍で膨大なデータ処理や提供もされ、効率よく検討ができたのも参加しての実感でした。メールで情報・文献の交換ができ、お互いの資料を共有しました。すでに中国や韓国などとメールができていたという話は、聞けば当たり前かもしれませんが私には新鮮でびっくりしたものです。中国語の翻訳サービスもあるのだそうです。委員の中国訪問のお土産に写真をデジカメでCDに焼き付けてもらったことも聞きました。中国ではデータベース化がかなり進んでいるとの話も驚きました。この経穴スタンダード化の後は日本の経穴書のデータベース化や日本固有の経穴書の研究が課題となっていくことも話題になりました。

経穴部位決定の困難

部会での原案決定は無味乾燥な文字が並んでいます。それまでの苦勞を1つ紹介してみたいと思います。

部会当日に腹部の経穴を検討していて「現代人は季肋部間が狭い」ので、たびたび機械的に部位を落としていくと、腹部の経穴が肋骨の上になってしまい、肋間の経穴との位置関係が合致しないことが起きてしまいます。たとえば、足の陽明胃経の不容穴は、ほぼ現行の案となりましたが、胃経の天枢穴（臍の外方2寸）の上方6寸、任脈の巨闕穴の外方2寸とすると、季肋部の狭い人は足の少陰腎経の步廊穴（第5肋間で正中線の外方2寸）のかなり近くにとれる場合もでてきます。不容穴は腹直筋中で第8肋軟骨付着部の直下に取れません。また、腹部の経穴を寸法通りにとっていくときれいな碁盤の目のようにはなりません。

その後のメールのやりとりで、季肋部の狭小化は、狭い住宅や子育て事情の変化で、赤ちゃ

んのハイハイが少ない、泣かせないため起きるという話題がありました。ほぼ全身の筋肉の発達が悪く、肋骨の狭小や腰痛の原因、転倒時に手を着けずに顔面を怪我しやすい、内臓が弱いなどの影響があるという論議がありました。解剖の本で肋骨が広い方が健康であると読んだ覚えがあり、臨床上も壮健だと感じられます。

江戸の経穴書

経穴部位の日本案決定のために古典や各委員の意見の提示の中でよく出たのは、経穴書の書誌学、明治前後の経穴書の後世・中国への影響です。

私は約20年、盲人史・鍼灸史・江戸幕府医療史を研究対象としてきましたが、今回の作業部会を通して、江戸時代の経穴書について見識がさらに深まりました。盲人鍼医杉山和一（1610～94）の一流派の秘伝書『（杉山夢想流）鍼術十箇条』（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、『臨床鍼灸古典全書』8、刊本、41～74頁、オリエント出版社、1989年）や藤林良伯『按摩手引』（医道の日本社）の中で、張介賓（景岳、1563～1640）の『類経』を典拠とあります。幕府医員佐田家分家で3代目玉淵道故（1662?～1754）は『鍼灸枢要』（写本、『臨床鍼灸古典全書』21、175～277頁、オリエント出版社、1990年）という経穴書を著しています。茶坊主から医員となった山崎家5代目宗運は現在東京国立博物館に所蔵されている鍼灸銅人形の製作に関わったと考えられています（小曾戸洋「東博銅人形の製作者および年代について—幕府医官山崎氏の事跡—」、『日本医史学雑誌』55-3、1988年）。私の勉強のためにも今回の部会は貴重な財産となったようです。

(〒371-0805 群馬県前橋市南町4-5-1

群馬県立盲学校)